

## 教養学科アメリカ科で学んで築いた職業人生

第3期（1955年卒業）伊木 常昭

### 進学、卒業、大学院、国際活動の職業に就いて 57年

大学2年の夏休み前、秋からの進学先の学部、学科の説明会が次々に開かれた。教養学科の説明会では創設者のひとりである前田陽一先生の言葉が私の心を強くとらえた。その趣旨は、「国際的活動をする人を育てること」と「新しい教養学科がどうなるかは君達の努力にかかっている、将来を自分で切り開く気持ちで進学すること」だった。この学科に是非進学したいと決心した。

私が生まれた頃から日本はずっと戦争をしていた。その最後の1年もずっと東京に住んでいて、日に日に焼け野原が広がるのを見、機銃掃射から身を守り、食べ物の不足に苦しんだ。このようなことを繰り返さないために国際的な仕事に就きたいと願っていた。

教養学科では最初国際関係科を選んだが、人数が多く講義のコースが主だった。一方、アメリカ科は人数が少なく、セミナースタイルのコースが圧倒的に多かったので、ただちにアメリカ科に進路を変えた。

私の中学高校時代は戦争で勉強が不足していたことを痛感していたので大学院に進学してこの遅れを取り戻すことにした。

その後の就職先は日本航空に決めた。国際線を始めて間もなく、今後国際的な仕事が増えるに違いないと思った。航空という手段で国際交流を増やせば平和に貢献できるとも思った。さらに、日本航空は戦後創業した会社で、あの戦争に関係していない存在だったことも考えた。

30年間勤務した間、数年を除いては国際的活動が私の仕事だった。中でも、12年以上国際線の運賃の責任者として極めて多くの交渉に参加した。当時は、一枚の航空券で世界中を旅行できることが最重要課題で、そのために航空会社が全会一致で運賃などを決め、それを諸国の政府が認可することが前提だったため交渉が多かった。

1988年に、日本航空を退職して特殊法人国際観光振興会（JNTO）に就職した。外国に向けて日本の観光宣伝をするのが仕事だった。当時は円高が進んで観光客誘致はむずかしかったが、東京に駐在する外国人記者の多くが協力をして日本の観光記事を書いてくれたのはありがたかった。

その後日本航空の商社部門である日航商事で3年働いたのち、1995年から新東京国際空港公団（その後成田国際空港公団、成田国際空港株式会社と組織・名称が変わった）で外国航空会社及び外国政府との交渉、空港の世界団体である国際空港評議会（ACI—Airports Council International）を通して空港が国

際協力をする業務を担当した。

2008年に成田国際空港株式会社を退職すると同時に、NPO 法人日本ハビタット協会の事務局長をボランティアで務めることになり現在に至っている。居住問題などに直面する世界の人たちを支援する仕事で、支援事業の企画、実施、契約などとともに国連機関である国連ハビタットとの協力などにもそれまでの国際活動の経験を活かしている。

職業について57年目になるが、そのうち数年を除き国際的活動が日々の仕事で、教養学科に進学したときの決意がそのまま実現できたのはまことに幸いなことだと感謝している。

### 教養学科アメリカ科で学んだことが職業に非常に役立った喜び

教養学科ではとくに次の先生方から教えていただいたことが、職業で繰り返し役立っている。

#### ● Gordon T. Bowles (Dr.)先生の文化人類学

文化人類学は必修科目ではなかったが、先生のコースに一度出たら夢中になり、卒業までの2年半の間続けて受講した。先生は、それぞれのカルチャーに特色があり、その特色を理解し尊重することが必要である、また、特定の価値判断にたつて、あるカルチャーを他のカルチャーと比べて進んでいるとか遅れている、あるカルチャーが正しくて他のカルチャーが悪いなどの判断はすべきではない、などをまず教えて下さったことが今でも深く記憶に残る。文化人類学は平和のための学問であると思った。

職業として外国の航空会社と交渉するようになって、交渉相手のカルチャー、会社、人柄などから、相手が求めているのが何なのかを知るために、先生にご指導いただいた学問の重要性を繰り返し感じた。

日本航空の仕事では、韓国及び中国の航空会社及びそれぞれの国の政府との接点が1970年代からしばしばあった。JNTOでは、韓国からの観光客誘致のためジャーナリストの団体を招待して話し合う機会があった。韓国で誘致活動も行った。成田空港に勤務してACIの仕事をしたときには、目覚ましい発展をする韓国及び中国の空港と協力してACIに多くの提案をして採択された。一国の空港の提案では通らなくても、3カ国の空港の提案になると通るのである。日中韓の空港の協力連携は完璧だった。Dr. Bowlesに教えていただいた文化人類学の知恵を総動員したことが大いに役立ったものと思う。その知恵には、相手国の言葉を学ぶことが含まれており、韓国語と中国語を東京から成田への通勤時間を利用して5年間勉強した。

- 中屋先生の米国史、米国思想史、齋藤真先生の米国の政治

中屋先生は教科書と教科書に関連する本（すべて英語）数十頁~百頁を毎週読んでレポートを提出する教育方法を取っておられた。そのレポートは、歴史上の「解釈」、「意味」、「流れ」に関わりつつ書くことを求められた。齋藤真先生は宿題を出されなかったが、先生の講義や著書で「文脈」という言葉を使って説明をなさり、感銘を受けることが多かった。

国際会議では前日の夕方になって分厚いペーパーが配られ、翌日の討論に使われることが多い。中屋先生の教育で、このようなことがあってもたじろぐことはなかった。もっとも、学生時代に手抜きに培った悪知恵—結論を先に読む、パラグラフの前半を重点的に読むなど—も活かしたが。

仕事をしていると、目の前にある問題に集中してしまい、その問題の背後にある全体の姿が見えないことがよくある。そのような時に、「解釈」、「意味」、「流れ」「文脈」をつかむ気持ちで、一段高い視点から目前の問題を考えてみるのが重要である。両先生から教えていただいたのはこの重要性であったと思う。とはいえ、それが難しいこともよく感じたものである。

中屋先生の宿題で米国の学者が書いた本を多数読みながら気がついたのが、米国の学者が実証を重んじることだった。自分の意見を説明するとき、その意見の根拠を必ず説明している。そこで、国際交渉や会議で私が意見を述べるときには、その根拠も必ず示すようにした。人々の賛成を得るには、少なくとも反対を受けないようにするには、当方の主張の事実に基づく根拠を示すことが有効であることを実体験した。

航空運送の分野では米国のシェアが非常に高い。そこで、交渉は米国の航空会社と米国政府を相手にすることが多かった。アメリカ科で米国について広く教えていただいたことが交渉で大変参考になった。

- 羽柴先生の英語

羽柴先生のクラスはすべて英語で行われた。最初に dictation があり、どれだけ聞き取れたかをその場で知ることができた。また、毎週英文で作文をして提出することになっていて、次の週に先生が念入りに添削して返して下さった。提出する英作文には自分の「考え」を英語で表現するよう指導いただいた。事実の羅列ではなく、考えを論理的に、且つ、効果的な表現で書くことの重要性を教えていただいた。卒業するまでの2年半、羽柴先生のクラスを取り続けて学ばせていただいた。羽柴先生は、中屋先生が出張中などの場合、アメリカ科の主任教授を務めておられた。

国際活動を職業にするようになって、英語で文書を書く回数が増えて行った。今でも仕事で E-メールと手紙を英語で書くことが多い。羽柴先生に懇

切に教えていただいたことに感謝しつつ。

- **大賀先生と Frau Wuess のドイツ語**

必修ではないが、私は外国語が好きなのでドイツ語のクラスにも出席した。大賀先生は講読ではなく、生き生きとした言葉の習得に重点を置いておられたので大変楽しかった。Frau Wuess は NHK 交響楽団のオーストリア人指揮者 Herr Wuess の妻だった。週に一度、美貌で美しい声の Frau Wuess のクラスに出ることも楽しい勉強だった。

1982 年から 4 年間、日本航空のドイツ地区の責任者になったときに、上の機会に学んだ生きたドイツ語が非常に役立つことになった。

できるだけドイツ語を使うようにしたが、労働組合とのむずかしい交渉は英語で通した。この交渉を通じて、ドイツのカルチャーでは意見を述べるときに、その意見の論理が首尾一貫して整っていることが極めて重視されるとわかった。日本の場合とは全く違うし、実証を重んじる米国のカルチャーとも距離がある。文化人類学を学んでいたのでこのことに気がつくことができたと感じた。

私にとって職業は人生そのものであったと思う。その職業に、教養学科で学んだことが直接的に非常に役立ったのは、私の人生を幸福にしてくれた大きな要素だった。1950 年代という日本がまだ貧しかった時代に、これほど贅沢な教育をしていただいたことに感謝あるのみである。

本稿では教養学科で教えて下さった立派な先生方のことを重点的に書いた。教養学科アメリカ科では学生の間接点が大変多かった。三期生同志だけでなく、先輩、後輩の方々との交わりを通じて多くのことを学ばせていただき、また、楽しませていただいた。本当によい、ありがたい学生時代だった。